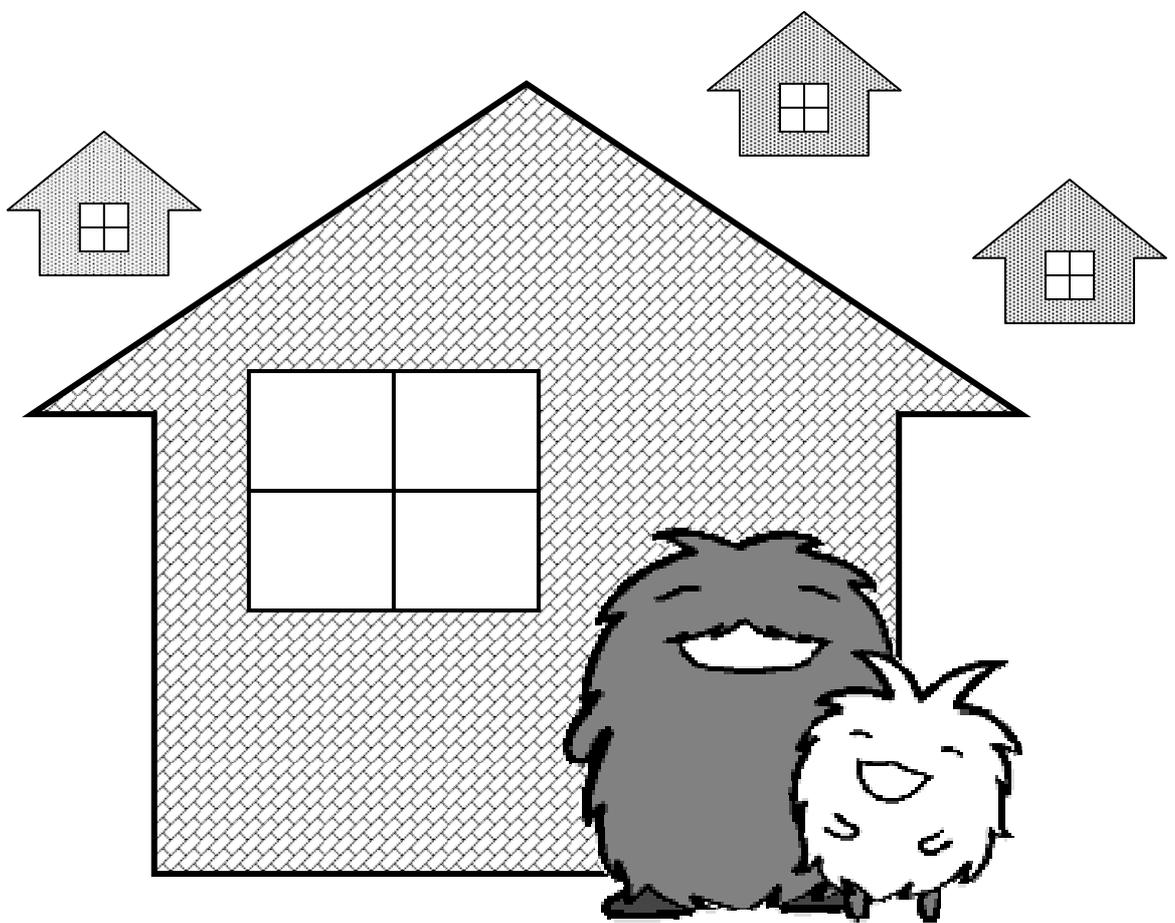


「1000人ホームステイボランティア」事業 活動報告書



財団法人名古屋国際センター
名古屋ホームステイボランティアセンター

目 次

はじめに

事業概要

1. 名古屋ホームステイボランティアセンター設立の趣旨	1
2. 設立の経緯と歩み	2
3. 名古屋ホームステイボランティアセンターの構成について	3
1) 組織について	3
2) 「愛・地球博ホームステイボランティア」について	4
4. 活動内容	5
1) 受入家庭募集と管理	5
2) 広報活動	9
3) ホームステイ・コーディネート	11

事業の成果

1. 総括: 成果と課題	16
2. 成果: データとアンケート結果から	18
1) データに見る成果	18
2) ゲスト・ホストの傾向	19
3) アンケートに見る成果	21
4) そのほかの成果	23
3. コーディネーターの視点から	24
1) 「安価な宿」のニーズと「交流を目的とした宿泊」のギャップ	24
2) 「博覧会見学」と「受入家庭との交流」の両立の困難	25
3) 受入家庭の傾向と課題	26
4) ゲストもホストも楽しんだ国内留学生のホームステイ	30
5) ネットワーク体制の課題	31
4. むすびにかえて	33

資料編

1. 受入実績	35
1) ホームステイ受入実績一覧	35
2) 国別受入実績一覧	59
3) 外国人ゲストの当プログラムの情報入手先	61
4) 団体別受入数一覧	62
5) ネットワーク参加団体への受入依頼実績一覧	63
6) 時期別・受入国数内訳	64
7) 時期別・滞在目的内訳	64
8) 時期別・団体ジャンル内訳	65

2. 愛・地球博ホームステイボランティアについてのデータ	66
1) 登録者数の推移	66
2) ネットワーク参加団体及び登録家庭数内訳	67
3) 財団法人名古屋国際センター登録者分	68
3. 研修一覧	73
1) コーディネーター向け研修	73
2) 受入家庭向け研修	73
3) 出前研修	73
4. 広報活動一覧	74
1) 広報作成物一覧	74
2) 広報先一覧	75
3) マスメディア取材一覧	78
5. 感想集・アンケート集計結果	79
1) ゲスト感想集	79
2) 受入家庭感想集	82
3) 受入家庭あてアンケート集計結果	90
4) ネットワーク参加団体感想集	94
5) ネットワーク参加団体あてアンケート集計	97
6. 申込書類一式	101
1) ホームステイ申込書類	101
2) 受入家庭用登録申込書類	118
3) 継続登録用申込書類	123
7. リーフレット、チラシ、掲載記事スクラップ	127

はじめに

名古屋市と財団法人名古屋国際センターでは、「2005年日本国際博覧会」を機に名古屋とその近隣を訪れる外国人を市民の家庭に受入れる「1000人ホームステイボランティア」事業を実施しました。

この事業は、外国人と市民との直接の交流を通じて外国人に日本の家庭生活を体験し当地域への親しみを持っていただくとともに、外国人と市民が互いに異なる文化や習慣についての理解を深め、「違い」や多様性を尊重する大切さに気づく機会を提供することを目的として行われました。

平成16年4月に、名古屋および近隣地域でホームステイの受入活動を行う20団体と財団法人名古屋国際センターでネットワーク組織「名古屋ホームステイボランティアセンター」をつくり、財団法人名古屋国際センターに事務局を置き、ホームステイ受入家庭・団体の登録、ホームステイの申込受付、滞在希望者と受入家庭・団体との仲介等を行いました。設立当初に20団体、1420家庭だった受入家庭は、たいへん多くの市民の方々にご協力をいただき、平成17年9月末には27団体、2201家庭の皆様にご登録いただきました。

平成17年3月の博覧会開催に先立ち、平成16年4月からホームステイの受入れを開始し、博覧会が閉幕した平成17年9月25日までに94カ国1地域から3826人の外国人の方々を受け入れることができました。たくさんの外国人の方々とう受入家庭の皆様になん会いと、草の根の国際交流の機会をもたらすことができたことをたいへん喜ばしく思っております。

この「1000人ホームステイボランティア」事業を総括し、ホームステイ交流の意義を伝え、この事業により財団法人名古屋国際センターが培った経験を今後の名古屋及び近隣の地域における国際交流・国際理解活動に生かせるよう記録することを目的として、ここに活動報告書を作成いたしました。この報告書では、当事業の活動内容及び実績について述べ、その成果について考察するとともに、受入実績や受入家庭に関するデータや外国人ゲスト及び受入家庭からの感想等を資料として添付しました。

最後になりましたが、「1000人ホームステイボランティア」事業にご協力いただきましたネットワーク協力団体の担当者の皆様及び受入家庭の皆様、その他関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

財団法人名古屋国際センター
名古屋ホームステイボランティアセンター

事業概要

1. 名古屋ホームステイボランティアセンター設立の趣旨

平成12年9月、名古屋市は、21世紀初頭の2010年までのまちづくりの指針となる基本計画「名古屋新世紀計画2010」を策定し、国際交流の推進・市民交流の促進のために、平成17年3月に開催される「2005年日本国際博覧会」において、ホームステイを通して市民の国際交流を推進する「1000人ホームステイボランティア」事業を実施することを決めました。

「2005年日本国際博覧会」が、市民参加型の博覧会という博覧会史上初の理念を掲げていたことを受け、「1000人ホームステイボランティア」事業の実施においては、市民が博覧会を機に名古屋と近隣の地域を訪れる外国人を家庭に招き入れて交流し、市民レベルでの国際交流・国際理解を進める傍ら、自ら参加することによって博覧会を盛り上げ、ボランティアとして交流するという気運を作ることを趣旨のひとつとしました。

博覧会開催時には名古屋と近隣の地域を訪れる外国人の数が増え、相当数のホームステイの需要が見込まれていた一方で、ホームステイの受け入れは各国際交流団体が独自に行っており、横断的な連携システムがなかったため、名古屋市は、博覧会が開催される1年前の平成16年3月までにホームステイの受け入れ体制を整備・拡充するために、財団法人名古屋国際センターを中心に愛知県内でホームステイの受け入れを行っている国際交流団体のネットワークを作り、同センターを事務局としてホームステイを希望する外国人からの申込窓口を一元化することにより、様々なニーズに最大限こたえることができるシステムを構築することを目指しました。

そこで、平成15年4月に財団法人名古屋国際センター内に「名古屋ホームステイボランティアセンター」を開設し、ネットワークコーディネーターとしてのホームステイ受入団体間の取りまとめを行うことをはじめ、ボランティア家庭の拡充・管理、国内外から寄せられるホームステイに関する問い合わせへの対応や申込みの受付、ホームステイのコーディネート、そして、新たな内外の団体とのつながりを作り出すべく、ホームステイ申込団体と受入団体の橋渡し役となることを、事務局の主な使命としました。

2. 設立の経緯と歩み

平成12年	9月	名古屋市「名古屋新世紀計画2010」策定
平成13年	1月	「1000人ホームステイボランティア」事業の発表
	4月	財団法人名古屋国際センターホームステイボランティア登録拡大（定期登録制から随時登録受付へ）開始
	6月	愛知県内のホームステイ受入団体にホームステイ受入実態調査を実施
平成14年	8月	ホームステイ受入団体との第一回意見交換会を開催
	3月	ホームステイ受入団体との第二回意見交換会を開催
	5月	「愛・地球博ボランティアセンター」設立準備委員会への参加
平成15年	8月	ホームステイ受入団体との第三回意見交換会を開催
	1月	「愛・地球博ボランティアセンター」国際部会への参加
	3月	ホームステイ受入団体へのネットワーク参加依頼（仮登録）を実施し、17団体が参加を表明
	4月	財団法人名古屋国際センター交流協力課内に「名古屋ホームステイボランティアセンター」を開設 「愛・地球博ホームステイボランティア」登録受付開始（個人登録及び団体登録）
	11月	ホームステイ受入団体ネットワーク意見交換会を開催
平成16年	1月	ホームステイ受入団体へのネットワークへの参加についての最終意思確認を実施し、20団体が正式に参加を表明
	4月	英語・中国語・韓国語専門スタッフ配置 ホームページ開設 ホームステイ申込受付及び受入開始（登録家庭数1460）
	7月	ネットワーク団体コーディネーター研修の実施（2回） ホームステイボランティア研修の実施（7月から11月までに計5回）
平成17年	12月	受入ゲスト1000人を超す
	2月	登録家庭数2000突破
	3月	愛・地球博開幕
	5月	受入ゲスト2000人を超す
	7月	受入ゲスト3000人を超す
	9月	愛・地球博閉幕 「愛・地球博ホームステイボランティア」活動終了

3. 名古屋ホームステイボランティアセンターの構成について

1) 組織について

名古屋ホームステイボランティアセンターは、名古屋および近隣地域でホームステイの受入活動を行う27団体と財団法人名古屋国際センターからなるネットワーク組織で、名古屋国際センターが各団体を取りまとめるコーディネーターとしての役割を担い、事務局を同センター交流協力課内に置き、平成16年4月1日から平成17年9月25日まで外国人グループのホームステイの受入活動を行いました。

活動終了時のホームステイ受入れ団体ネットワークへの参加27団体は次のとおりです。

ホームステイ受入団体ネットワーク参加団体（平成17年9月末現在、五十音順）

(財)愛知県国際交流協会
一宮市国際交流協会
岩倉市国際交流協会
大府市国際交流協会
岡崎市国際交流協会
春日井市姉妹都市市民の会
刈谷市国際交流協会
Kasugai International Friendship (KIF)
財団法人 岐阜市国際交流協会
清洲町国際交流協会
幸田町国際交流協会
江南市国際交流協会
国際交流はなのき会
ザ・フレンドシップ・フォース オブ 愛知
瀬戸市国際センター(瀬戸の家事務局)
東海市国際交流協会
豊明市国際交流協会
財)豊田市国際交流協会ボランティアグループ オープンハート
長久手町国際交流協会
名古屋日豪ニュージージーランド協会
第15回日米草の根交流サミット東海大会ボランティア実行委員会
日本ボーイスカウト 愛知連盟
言語交流研究所 ヒッポファミリークラブ中部
へいわ西尾張インターナショナルクラブ
美浜町ホストファミリーボランティア
(財)三好町国際交流協会
(財)ラボ国際交流センター 中部事務所

2) 「愛・地球博ホームステイボランティア」について

名古屋ホームステイボランティアセンターのホストファミリーは、ネットワーク参加団体に登録しているボランティアと、財団法人名古屋国際センターに登録しているボランティアで構成されました。ボランティアの名称を「2005年日本国際博覧会」にちなんで、「愛・地球博ホームステイボランティア」としました。

ボランティア活動の趣旨は、『2005年日本国際博覧会』に関連して名古屋及び近隣地域に滞在する外国人に日本家庭での宿泊・生活体験を通じて、日本や名古屋のことを知ってもらうとともに、相互理解を深め、市民の方々の国際交流を促進するためにホームステイを受け入れていただくこととし、その活動期間を平成16年4月1日から平成17年9月25日までとしました。

活動終了時である平成17年9月末日の登録家庭数の内訳は次のとおりです。
(平成16年4月から平成17年9月末までの登録者数の推移については資料編66ページを参照)

ホストファミリーの内訳

所属別	平成17年9月末日 (活動終了時)
ネットワーク参加団体 登録家庭	1811家庭
財団法人名古屋国際センター 登録家庭	390家庭
合計	2201家庭

4 . 活動内容

1) 受入家庭募集と管理

(1) 受入ボランティアの募集

「愛・地球博ホームステイボランティア」として、ホームステイ受入団体ネットワークに参加していただく団体向けと、名古屋ホームステイボランティアセンター(財団法人名古屋国際センター)に個人としてボランティア登録していただく市民向けに、それぞれ募集活動を行いました。

ア . ネットワーク参加団体募集

平成16年4月のホームステイ受入開始にむけて、平成13年6月から平成16年3月までの間をホームステイ受入団体ネットワーク設立準備期間とし、愛知県内のホームステイの受入活動を行っている団体にネットワークへの参加を呼びかけました。

平成16年4月以降は、財団法人名古屋国際センターの月刊広報誌「ニック・ニュース」、同センターホームページ、名古屋ホームステイボランティアセンターホームページ、広報なごや等、事務局の関係機関の広報媒体を通して参加団体の募集を行いました。

a . ホームステイ受入開始以前(平成13年6月～平成16年3月)

平成13年6月に愛知県内でホームステイの受入活動を行っている122団体あてにホームステイ受入実態調査を行い、当ネットワークへの参加の関心の有無について伺いました。このうち関心があると答えた27団体により、平成13年8月から15年11月までの間に4回にわたり意見交換会を開催し、平成16年1月に最終意思確認をした結果、20団体が参加を表明しました。

ネットワークへの参加にあたり、事務局は受入条件に関する統一の規定を設けず、各団体の既存の条件を採用しました。

参加団体の募集は次のように実施しました。

調査団体抽出方法:財団法人愛知県国際交流協会発行「国際交流ハンドブック」より愛知県内でホームステイ受入活動を行っている団体を抽出。

申込資格:名古屋市または近郊に活動拠点を置く、構成メンバーが10名以上のボランティア団体・グループ。国際交流活動を目的とした団体でなくても可。

登録方法:事前調査により特定した団体向けに意見交換会を実施。必要事項を記入した所定の登録用紙を事務局に提出。

- b．ホームステイ受入開始以後（平成16年4月～平成17年7月）
平成16年4月から平成17年7月末までに新たに7団体が登録しました。
平成16年4月以降の参加団体の登録にあたっては個別に面談を実施しました。
（平成16年4月以降の募集案内についての詳細は資料編118ページを参照）

イ．個人登録ボランティア募集

財団法人名古屋国際センターは、昭和59年設立当初からホームステイボランティア制度を設け、隔年でボランティアを募集してきましたが、平成13年4月から平成17年7月末までは受入体制拡大のため、随時、登録ボランティアを募集しました。なお、名古屋ホームステイボランティアセンターを開設した平成15年4月からは活動期間を博覧会終了時まで限定した「愛・地球博ホームステイボランティア 個人登録ボランティア」として募集しました。合計で371人が登録しました。（登録者数の月別・年度別内訳についての詳細は資料編68ページを参照）

個人登録ボランティア募集は次のように行いました。（募集案内についての詳細は資料編120ページを参照）

申込資格：名古屋市または近郊に在住する満20歳以上の方で、家族の同意を得ていること。家族構成、居住形態、外国語能力は問わない。

登録方法：財団法人名古屋国際センターにて事前予約による個別面談。来館の際に必要な事項を記入した所定の登録用紙を持参。

案内告知媒体：広報なごや、財団法人名古屋国際センター月刊広報誌「ニック・ニュース」、同センターホームページ、名古屋ホームステイボランティアセンターホームページ

（2）研修活動

ホームステイ受入団体ネットワークに参加の団体とその登録ボランティア及び財団法人名古屋国際センターの登録ボランティアを対象に、それぞれ研修を行いました。

ア．コーディネーター向け研修

ネットワーク参加団体及び愛知県内でホームステイ受入活動を行っている団体のコーディネーター業務担当者を対象に、コーディネーター業務の基礎知識や留意点等を内容とする研修を行いました。

開催日 平成16年7月8日、9日
会場 豊橋市民センター、愛知県三の丸庁舎
参加者数 58名

イ．受入家庭向け研修

ネットワーク参加団体の登録ボランティア及び財団法人名古屋国際センターの登録ボランティアを対象に、ホームステイ受入れの基礎知識、受入経験者の体験談、ボランティア同士の意見交換等を内容とする研修を愛・地球博ボランティアセンターとの共催で実施しました。

開催日 平成16年7月18日、8月4日、9月26日、10月23日、
11月16日
会場 財団法人名古屋国際センター
参加者数 550名

ウ．出前研修

ネットワーク参加団体からの要望に応じ、各団体の登録ボランティアを対象に、ホームステイ受入れの基礎知識、受入経験者の体験談、ボランティア同士の意見交換等の研修を行いました。

開催日 平成16年8月3日、9月11日、11月6日、
平成17年3月6日、5月15日
会場 春日井青少年女性センター、長久手町役場、大府市役所、清洲町町民センター、江南市民体育館、
参加者数 111名

エ．ホームステイ受入れの手引きの作成・配布

ホームステイで外国人を家庭に受入れるにあたっての心構えや留意点についてまとめたホームステイ受入れの手引き「ようこそ ふだん着のわが家へ」を作成し、ホームステイ受入団体ネットワーク参加団体の登録ボランティア及び財団法人名古屋国際センターの個人登録ボランティアに配布しました。

発行部数 2500部
配布期間 平成16年6月から平成17年9月25日まで

(3) 活動終了後の事務

ア．ネットワーク参加団体向け活動終了報告会

ホームステイ受入団体ネットワーク参加団体向けに、「愛・地球博ホームステイボランティア」活動終了報告会を実施し、受入実績報告、活動期間中のホームステイ受入れについての意見・情報交換等、各団体の活動期間内のホームステイ受入活動についての報告を行いました。

開催日 平成17年11月2日
 会場 財団法人名古屋国際センター
 参加者数 8団体15名

イ．ネットワーク参加団体向け継続登録事務手続き

当地域における異文化理解・草の根の国際交流を推進する一助として博覧会終了後もネットワーク体制を維持すべく、参加27団体に協力を呼びかけたところ、平成17年11月末現在、19団体が引き続きネットワークへの参加を表明しました。

ホームステイ受入団体ネットワーク継続参加表明団体
 (平成17年11月末日現在、五十音順)

(財)愛知県国際交流協会
一宮市国際交流協会
岩倉市国際交流協会
大府市国際交流協会
Kasugai International Friendship (KIF)
清洲町国際交流協会
幸田町国際交流協会
江南市国際交流協会
国際交流はなのき会
ザ・フレンドシップ・フォース オブ 愛知
瀬戸市国際センター(瀬戸の家事務局)
東海市国際交流協会
(財)豊田市国際交流協会ボランティアグループ オープンハート
名古屋日豪ニュージーランド協会
日本ボーイスカウト 愛知連盟
言語交流研究所 ヒップファミリークラブ中部
美浜町ホストファミリーボランティア
(財)三好町国際交流協会
(財)ラボ国際交流センター 中部事務所

ウ．個人登録ボランティア向け登録移行事務手続き

「愛・地球博ホームステイボランティア」は活動期間を予め限定して募集したのですが、「博覧会終了後もホームステイ受入活動を行いたい」という登録者からの要望に応え、財団法人名古屋国際センターのホームステイボランティアとして新たに登録しなおし、活動を継続することとしました。平成17年9月20日現在の登録者のうち、下記の対象者に博覧会終了後に財団法人名古屋国際センターのホームステイボ

ランティアとして活動を続ける意思があるかどうかを伺い、希望者に対して登録移行事務手続きを行いました。(登録移行条件についての詳細は資料編125ページを参照)

対象者：平成15年4月1日から平成17年7月末までに登録した「愛・地球博ホームステイボランティア 個人登録ボランティア」278名(平成17年9月20日現在)のうち、平成17年9月末までに受入実績が1回以上あった者 191名

登録移行条件：ホームステイボランティア活動の心構え等を記した「登録移行願い兼同意書」の内容に同意すること。

登録移行者数：136名

エ．活動報告書の作成

1000人ホームステイボランティア事業の趣旨、概要、実績についての記述および統計資料、アンケート結果からなる報告書(本稿)を作成しました。

2) 広報活動

(1) ゲスト向けPR

多くの外国人の方々に当事業のホームステイ・プログラムを利用していただくために、主として平成16年4月より1年間にわたり当プログラムの広報活動を重点的に行いました。その活動は大きく分けると、関係・対象機関へのリーフレット、チラシ、ポスター等広報物の配布、新聞・テレビ等のマスメディアへの取材対応、日本政府公式記念事業への登録の3項目となります。なお、同期間内にはホストファミリーの募集に対する広報活動も行いました。

(広報活動の詳細については資料編の74～78ページを参照)

ア．広報物の作成・配布

平成16年4月以前に名古屋市により作成されたホームステイを呼びかけるリーフレット「Welcome! EXPO 2005 AICHI, JAPAN」(英語・日本語版、中国語・日本語版、韓国語・日本語版)4000部を関係・対象機関あてに送付しました。

リーフレット送付時には、国内留学生向けとそれ以外の一般ゲスト向けにそれぞれプログラムの内容や申込方法について簡単にまとめたPRチラシ(日本語版、英語版、中国語版、ハングル版)を作成し同封しました。

これらの広報物送付後には、特に国内に在住する外国人に当プログラムについての周知をはかるため、国内の大学、愛知県内の留学生・研修生の受入・支援活動を行っている国際交流団体及び各都道府県及び政令指定都市の国際交流協会あてに電話による当プログラムの宣伝活動を行いました。またインターネットで日本研究科等を持

つ海外の大学や研究機関を検索し、当プログラムを紹介するEメールを送りました。

さらに、博覧会開催の時期に合わせてポスター「ホームステイで日本を体験しませんか？」(日本語版、英語版)1000部及びポスター同デザインのA4版チラシ(日本語・英語版)2000部を作成し、関係・対象機関あてに送付しました。

また、当プログラムの周知と利用者の促進を図るために財団法人名古屋国際センターの事業関係者(名古屋国際センター国際留学生会館入居者、なごや市民留学生交流員支援金受給者*及び「NIC地球市民教室」外国人講師**)を対象に、特別ホームステイ・プログラムを15回にわたり企画・実施し、43名を受入れました。

注))

なごや市民留学生交流員支援金受給者*

名古屋市では愛知県内の大学及び短期大学に在籍する私費留学生を対象に奨学金支給制度を実施しています。交流員は名古屋市を海外に広く紹介するとともに名古屋市民との交流を図る役割を担っています。

「NIC地球市民教室」外国人講師**

財団法人名古屋国際センターでは地域の国際化の進展、学校教育における「国際理解教育」への関心の高まりを受け、平成15年1月から外国人講師を地域の学校や団体に派遣する「NIC地球市民教室」事業を行っています。財団法人名古屋国際センターの外国人スタッフやボランティア、国際留学生会館に入居する留学生が講師となり、派遣先の要請に合わせて出身国について日本語で紹介したり、出身国の料理を一緒に作ったり、ゲームなどをしたりして異文化理解と交流に務めています。

イ．マスメディアへの取材対応

テレビやラジオ、新聞・雑誌からの取材には積極的に応じ、マスメディアを通じた当プログラムの広報に努めました。

ウ．政府公式記念事業への登録

日本政府による二国間交流年実行委員会(2005年EU日本市民交流年及び日韓友情年2005)の公式記念事業に登録し、記念事業参加者への周知を図りました。

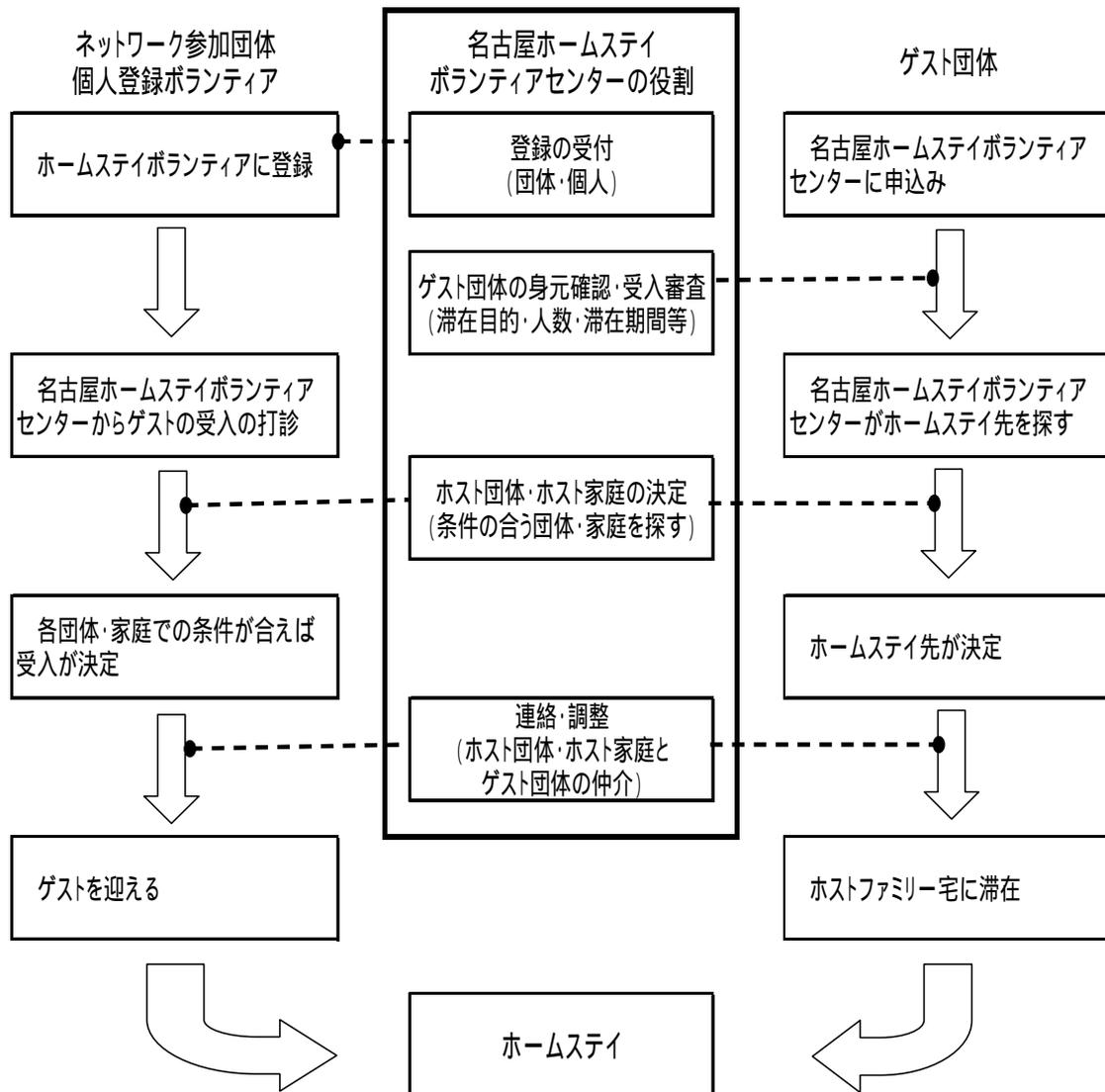
(2) ホスト向けPR

「1000人ホームステイボランティア」の登録ボランティアとなる家庭の募集にあたり、平成16年4月以前に名古屋市が作成したリーフレット「1000人ホームステイボランティア」を名古屋市の関係機関、名古屋市内及び近隣のホームステイ受入活動を行う団体及び財団法人名古屋国際センターの窓口にて配布しました。

3) ホームステイ・コーディネート

(1) コーディネートの流れ

名古屋ホームステイボランティアセンターにおけるホームステイのコーディネート事務の流れは次のとおりです(手続きの詳細、申込書類等については巻末資料6をご覧ください)。



(2) 受入団体・受入家庭募集

ホームステイの受入募集案内をネットワーク参加団体及び財団法人名古屋国際センターの個人登録家庭あてに次のとおり行いました。

ア．ネットワーク参加団体あてホスト団体募集

ネットワーク参加団体により多くのホームステイの受入れの機会を提供することはもちろん、独自の活動では知りえない国内外のゲスト・グループとのつながりを持つきっかけを提供することをねらいとして、平成16年7月より平成17年8月まで随時、名古屋ホームステイボランティアセンターが申込みを受け付けたホームステイのうち、ホームステイのコーディネートに比較的時間の余裕のあるもの25件を対象に受入団体を募りました。

募集は原則として参加全団体あてに一斉にファックス、郵送またはEメールにて行いましたが、25件のうちの8件は各団体より事前に申告された各団体の受入れの条件とゲスト・グループの人数や滞在日数、希望等を考慮し、予め特定の団体に絞って案内をしました。

イ．個人登録ボランティアあて受入家庭募集

平成16年4月より平成17年9月まで随時、「愛・地球博ホームステイボランティア 個人登録ボランティア（財団法人名古屋国際センターに所属）」あてに242件（申込後のキャンセル分を含む）のホームステイの受入案内を行いました。

このうち、ゲスト・グループが数名以上のまとまった団体または1ヶ月を超える長期滞在希望者である場合は、予め登録時に各ボランティアが選択した希望の連絡方法（Eメール、ファックス、郵送のいずれか）にそって登録ボランティア全員に通知しました。

ゲストが留学生などの個人である場合は、ボランティア登録用紙に記載の家庭の状況（家族構成など）のデータを参考に、予め特定の家庭に絞って電話で個別に案内を行いました。

(3) ホームステイ受入実績

平成16年4月1日から平成17年9月25日までに名古屋ホームステイボランティアセンターで受け入れたホームステイは、547件3826人（94カ国1地域）でした。このうち、ネットワーク参加団体による受入実績は、343件3063人（83カ国1地域）、財団法人名古屋国際センターの個人登録ボランティアによる受入実績は、204件763人（55カ国1地域）でした。

総数547件のうち、238件1654人は来日・来訪の目的が博覧会に関連するものでした。

ゲスト・グループの所属団体別では国内外の大学などの学校からの申込みが288件

と最も多く、続いて国際交流活動を主として行っている国内外の民間団体131件、政府や市町村、博覧会パビリオン等の公的機関95件、旅行社・会社等のその他の団体33件という順になりました。

ゲストの出身国別の上位5カ国は次のとおりです。

名古屋ホームステイボランティアセンター 滞在ゲスト出身国別ベスト5（全体）
（平成16年4月1日～平成17年9月25日）

1. アメリカ合衆国	846人
2. 大韓民国	725人
3. 中華人民共和国	354人（香港・マカオ特別行政区を含む）
4. マレーシア	252人
5. カナダ	220人

但し、1位のアメリカ合衆国846人のうち541人は「日米草の根サミット」参加者。

ア. 博覧会会期前（平成16年4月1日～平成17年3月24日）

博覧会会期前（平成16年4月1日～平成17年3月24日）に名古屋ホームステイボランティアセンターで受け入れたホームステイは、188件1598人（77カ国1地域）でした。このうち10件72人は来日・来訪の目的が博覧会のプレイベント等博覧会に関連するものでした。

ゲスト・グループの所属団体別では学校からの申込みが79件と最も多く、続いて民間団体70件、公的機関37件、旅行社・会社等のその他の団体2件という順になりました。

ゲストの出身国上位5カ国は次のとおりです。

名古屋ホームステイボランティアセンター 滞在ゲスト出身国別ベスト5（全体）
（平成16年4月1日～平成17年3月24日）

1. 大韓民国	483人
2. 中華人民共和国	224人（香港・マカオ特別行政区を含む）
3. アメリカ合衆国	144人
4. マレーシア	118人
5. タイ	95人

a. ネットワーク参加団体受入分

博覧会会期前に125件1199人（63カ国1地域）をネットワーク参加団体の16団体が受入れました。このうち7件69人は来日・来訪の目的が博覧会のプレイベント等博覧会に関連するものでした。ゲスト・グループの所属団体別では民間団体からの申込みが61件と最も多く、続いて学校52件、公的機関12件という順となり、旅行社・会社等のその他の団体からの申込みはありませんでした。

b.個人登録ボランティア（財団法人名古屋国際センター）受入分

個人登録ボランティア（財団法人名古屋国際センターに所属する登録家庭）が博覧会会期前に受け入れたホームステイは、63件399人（47カ国1地域）でした。このうち3件3人は来日・来訪の目的が博覧会のプレイベント等博覧会に関連するものでした。

総数63件のうち、15件は名古屋市内または近郊に住む留学生などを対象とした当ホームステイ・プログラムの広報活動を兼ねた特別企画「お試しホームステイ」を実施し、43名を受入れました。

ゲスト・グループの所属団体別では学校からの申込みが27件と最も多く、続いて公的機関25件、民間団体9件、旅行社・会社等のその他の団体2件という順でした。

イ.博覧会会期中（平成17年3月25日～9月25日）

博覧会会期中（平成17年3月25日～平成17年9月25日）に名古屋ホームステイボランティアセンターで受け入れたホームステイは、359件2228人（68カ国1地域）でした。このうち、228件1582人は来日・来訪の目的が博覧会に関連するものでした。

ゲスト・グループの所属団体別では学校からの申込みが209件と最も多く、続いて民間団体61件、公的機関58件、旅行社等その他の団体31件という順になりました。

ゲストの出身国上位5カ国は次のとおりです。

名古屋ホームステイボランティアセンター 滞在ゲスト出身国別ベスト5（全体） （平成17年3月25日～平成17年9月25日）

1. アメリカ合衆国	702人
2. 大韓民国	242人
3. カナダ	163人
4. マレーシア	134人
5. 中華人民共和国	130人（香港・マカオ特別行政区を含む）

但し、1位のアメリカ合衆国702人のうち541人は「日米草の根サミット」参加者。

a.ネットワーク参加団体受入分

博覧会会期中に218件1864人（63カ国1地域）をネットワーク参加団体の23団体が受入れました。このうち130件1279人は来日・来訪の目的が博覧会に関連するものでした。ゲスト・グループの所属団体別では学校からの申込みが98件と最も多く、続いて民間団体53件、公的機関49件、旅行社等その他の団体18件という順でした。

b.個人登録ボランティア（財団法人名古屋国際センター）受入分

個人登録ボランティア（財団法人名古屋国

際センターに所属する登録家庭）が博覧会会期中に受け入れたホームステイは、141件364人（30カ国1地域）でした。このうち98件303人は来日・来訪の目的が博覧会に関連するものでした。

ゲスト・グループの所属別では学校からの申込みが111件と最も多く、続いて旅行社等その他の団体13件、公的機関9件、民間団体8件という順でした。

ウ. ネットワーク参加団体への依頼

名古屋ホームステイボランティアセンターが受付けた外国人グループからのホームステイの申込みのうち、25件をネットワーク参加団体に受入れを依頼しました。このうち、ネットワーク参加団体10団体が21件321人を受入れました。

（受入実績一覧内訳については、資料編63ページを参照）

ネットワーク参加団体への受入依頼実績一覧

	ネットワーク参加団体名	受入実績 (件数)	受入人数 (人)
1	言語交流研究所ヒッポファミリークラブ中部	6	159
2	瀬戸市国際センター	5	68
3	豊明市国際交流協会	2	4
4	三好町国際交流協会	2	4
5	岩倉市国際交流協会	1	2
6	大府市国際交流協会	1	43
7	Kasugai International Friendship	1	10
8	刈谷市国際交流協会	1	12
9	清洲町国際交流協会	1	8
10	豊田市国際交流協会ボランティアグループ オープンハート	1	13
	合計	21	321

事業の成果

ここでは「1000人ホームステイボランティア」事業の成果について、主として財団法人名古屋国際センターが受入れたホームステイの実績をもとに記します。まず全体としての成果について述べ、次に成果の数量的な側面、本事業の下で行われたホームステイの特徴や傾向についてまとめます。これらをふまえてホームステイ交流をめぐる現状について、コーディネーターの視点から考察を加えます。さらに、今後、名古屋と近隣の地域におけるホームステイを通じた交流、及び異文化理解をすすめていくための課題について述べたいと思います。

1．総括：成果と課題

[異文化交流の促進]

この1年6カ月のあいだにたくさんの外国人と日本の家庭がホームステイによる交流の機会を得られました。たくさんの草の根のつながりが生まれ、そのつながりが現在も着実に育まれていること、そして異文化や習慣の違いなどに対する理解が深められたことは、当事業の成果として高く評価できるものです。

また、当事業を機にアジアからのゲストをたくさん受け入れられたことや、日本国内の大学や日本語学校で勉学に励む留学生に日本の家庭での生活体験や家族との交流の機会を提供できたことは、留学生はもちろん、日本人が異文化理解及び地域社会における多文化共生という課題に目をひらくきっかけとして今後に期待が寄せられます。

[認知度の上昇と草の根のつながりの強化]

さらには、新たに多くの国内外のゲスト団体のあいだで「名古屋でホームステイによる国際交流ができる」という認知度が上昇したことや、当地域でホームステイの受入活動を行っている団体どうしのつながりが強化できたことも、これからの当地域でのホームステイによる国際交流活動を推し進めていくうえでの大きな足がかりとなり得ます。

[今後の課題：内外の連携の維持]

プログラムを利用した方々の来日・来訪の目的はおよそ半数が博覧会に関連するもの（見学を含む）でした。博覧会終了後に純粋にホームステイを楽しむために当地域を新たに訪れる、または再訪する外国人がどれほどあるかについてはまったくの未知数ですが、当事業により培ったゲスト団体とのつながりはもちろん、「ホームステイ受入団体ネットワーク」に参加・協力いただいた当地域の団体とのつながりを今後どう活かしていくのかということが今後の課題として第一に挙げられます。

また、登録家庭やホームステイに興味のある日本人のなかに、なお散見される少ない「国際交流＝英語での交流」、「外国人＝欧米の人または英語を話す人」という固定

観念が多様な国や文化の人々との出会いの妨げになっているという現状や、文化・習慣の多様さを肌で知り互いの違いを尊重することの大切さに気づく過程において、受入家庭及びゲストにとって「違い」が不快感を持って受け止められてしまう場合に、プログラムを提供する側としてどう対応するのかといったことは、今後もホームステイによる国際交流活動を押し進めていく際に取り組まなければならない課題として挙げられるでしょう。

2. 成果：データとアンケート結果から

ここでは、「1000人ホームステイボランティア」事業の成果について、受入実績や登録団体・家庭数などの各種データや外国人ゲスト及び受入家庭からのアンケートなどを用いて述べます。

1) データに見る成果

受入実績データによると、当事業によるホームステイの受入れを開始する前年の平成15年度の財団法人名古屋国際センターのホームステイ受入実績は51家庭による10件65人の受入れでしたが、事業開始後の平成16年度(平成16年4月1日から平成17年3月31日まで)の受入実績は308家庭による66件419人の受入れでした。これによると、ホームステイ交流の機会を得た家庭が1年前に比べると約6倍に増えていることとなります。

さらには、博覧会会期中(平成17年3月25日から9月25日まで)の受入実績は273家庭による141件364人の受入れでしたが、この半年間と平成15年の1年間の受入家庭数を比べても約5倍に増大しています。

当事業では、名古屋及び近隣の地域の国際交流団体と協力してホームステイの受入れを行う「ホームステイ受入団体ネットワーク」の構築を試みましたが、最終的に27団体から活動趣旨の賛同を得られ、各団体に所属する登録家庭数は博覧会の開催が近づくにつれて毎月増加し、最も多い時には当事業の開始時と比べて1.7倍の1958家庭にご協力いただきました。

十分な受入家庭を確保できた結果として、事業実施期間中(平成16年4月1日から平成17年9月25日まで)にはネットワーク全体で547件3826人の外国人を受け入れることができました。なお、このうち名古屋ホームステイボランティアセンターからネットワーク参加団体に依頼した受入れは、総数の約1割となる21件321人でした。

これらのデータを総括すると、当事業がもたらした成果として、次のようなことが言えます。

- ・名古屋及び近隣の地域の人々にホームステイを通しての国内外の外国人との国際交流・異文化理解の機会を大幅に拡大した。
- ・ネットワーク参加団体の協力により、当地域において画期的とも言うべき横断的なホームステイ受入れ連携システムを築くことができた。
- ・国内外の教育機関及び団体に、当地域でホームステイ交流ができることを広く知らしめた。
- ・博覧会終了後も継続して当地域でのホームステイを通しての国際交流・異文化理解活動を推進する基礎を確立することができた。

2) ゲスト・ホストの傾向

(1) ゲストの傾向

ア．出身国別

名古屋ホームステイボランティアセンターがネットワーク参加団体と協力して受け入れたホームステイではゲストの出身国の上位3カ国はアメリカ、韓国、中国だったのに対し、財団法人名古屋国際センターが受入れたゲストの出身国の上位3カ国は韓国、中国、台湾でした。特に台湾からのゲストは博覧会会期中に急増しました。博覧会の会期を問わず受入人数が多かったのは韓国からのゲストでした。

イ．来日・来訪目的、所属団体別

博覧会会期前のホームステイにおいては、来日・来訪の目的としてホームステイによる交流を挙げるゲストがほとんどでした。博覧会関連のゲストはパビリオンで働くスタッフ3名のみでした。

博覧会会期中は博覧会の見学を目的としたゲストが全体の7割を占めました。

所属団体別では高校や大学等の教育機関に所属しているゲストが最も多く全体の7割近くを占めました。国内の大学及び日本語学校に在籍する留学生の受入れを積極的に行った結果、117人(客員研究員、客員教授、特別研究員を含む)を受入れることができました。参考までに、留学生の出身国で一番多かった国は中国でした。

留学生のホームステイはゲスト及び受入家庭ともに大変好評でした。受入家庭にとっては日本語で交流ができるということと、日本に滞在しているので生活するうえでの基礎知識があり、日本の文化や日本人の考え方について理解してもらいやすいことが魅力のようでした。また、ゲストにとっては日本の家庭における生活文化を体験できるだけでなく、普段接することがない様々な世代の日本人と接することができ、家族の暖かさに触れられるということが良いようでした。

ウ．情報入手先別

ゲストが当プログラムについての情報の入手先として最も多かったのは、各機関に送付した広報用ちらしで全体の6割を占めました。次に多かったのはホームページで3割を占めました。

エ．国によりちがうホームステイのイメージ

ゲストによって彼らが抱いているホームステイのイメージに差がありました。ホームステイという文化に馴染みの薄い国からのゲストはホームステイがどのようなものか見当がつかないため、受入家庭から接待を受けられると勘違いをしていたり、休息するための部屋と食事と洗面道具を提供してくれる旅館のような場所と思い込

んでいたりすることがありました。

一方、ホームステイの定義が浸透していると思われる国からのゲストのなかにも、当プログラムのホームステイの趣旨に対する理解が乏しい場合があります。費用さえ払えば終日自由に行動できると思っていたり、門限などの生活ルールの遵守を束縛に感じたりするゲストもいました。

(2) 受入家庭の傾向

ア．ボランティア登録の動機

まず、ホストファミリーとしてボランティア登録を希望する方々は、登録の動機に「子どもの教育のため」「語学（特に英語）の実践のチャンスにしたい」「博覧会を盛り上げたい」といったことから挙げられる方が多く、ホームステイの受入れや国際交流という活動自体に興味あるいは意識を持って登録した方は少ないように見受けられました。少数派ですが、「自分や家族が海外でお世話になったので恩返しをしたい」との動機により登録を希望された方々もいました。

イ．応募率に見る受入れの傾向

ゲストが欧米出身であったり、英語を話したり、あるいは学生、特に小学生くらいの子どもの場合、ホームステイの受入れに関心を寄せる受入家庭が多くなり、応募率も高くなりました。また、いわゆる「韓流ブーム」の時期と重なったこともあり、韓国からのゲストも受入家庭のあいだで比較的に希望が高く、応募率に反映された結果となりました。

また、女性のゲストの受入れを希望する受入家庭がたいへん多く、ゲストに対する応募家庭数も高くなる傾向にありました。女性ゲストを希望する理由としては、家庭のなかで主体的にホームステイの受入れ活動を行うのが女性であることが多いため、「女性ゲストのほうが付き合いやすい」「女性ゲストのほうが共通の話題がある」と考えるようです。

ゲストの滞在期間としては、短期間、特に週末をはさんだ2泊3日程度の受入れを希望する家庭が最も多く、滞在期間が長くなるほどゲストの出身国や使用言語、性別に関わらず受入れていただける家庭が少なくなるという傾向がありました。

また、経験の度合いに関わらず、性別や出身国、言語等ゲストに対するこだわりが少ない家庭ほど、応募回数も増えるとともに受入回数が増えるという傾向も見られました。

(受入家庭の受入回数については資料編70ページを参照)

3) アンケートに見る成果

「1000人ホームステイボランティア」事業実施期間中に、財団法人名古屋国際センターで受け入れたホームステイにおいて、外国人ゲストと受入家庭向けにホームステイの感想を伺うためのアンケートを実施しました。ここでは、その一部を紹介しながら考察します。

(1) 草の根のつながり

全般的には、外国人ゲスト及び受入家庭ともにこのホームステイを通しての交流を楽しまれたという意見がアンケートにおいて大多数を占めました。

博覧会開催期間中のみ、受入家庭あてにホームステイ受入れの満足度についての調査を行ったところ、72%の方々が4段階評価のうちで最高の評価である「満足」と回答しました。受入家庭のなかには、手紙やメールでゲストと連絡を取り続ける方々はもちろん、留学生の「日本の親」となって交流を続ける方や、ゲストに会うために海を越えて出かけていく方など、交流を一過性のものとせず持続させようという意思のある方々が多く見受けられました。

受入家庭と同様に、外国人ゲストもホームステイを楽しまれた方が圧倒的に多かったようです。特筆すべき点としては、ゲストのなかにこのプログラムを一度体験して気に入り、再度利用していただいた方々が何人もいたということです。例えば、自分の家族にも同じ思いを共有させたいと娘や息子と呼び寄せて再度一緒にホームステイをしたペルーやカナダの留学生、他のメンバーにもぜひ体験させたいと第二陣を送り込んだマレーシアのグループなど。韓国の学校法人が経営する旅行社は、高校生と大学生を対象にホームステイ交流を主旨とした旅行を4回企画・実施しました。他にも、口コミで友達にこのプログラムを広めてくれた留学生や海外の大学生たちなどもいました。

これらはすべて、わずか1年6ヶ月の間に草の根の国際交流が芽生え、着実につながりが育まれていることのあらわれと言ってよいでしょう。

(2) 相互理解の深まり

外国人ゲストと受入家庭から寄せられた感想のうちで最も多かったのはゲスト及び受入家庭ともに、「異文化や習慣の違いに対する理解が深まった」あるいは「国や文化を超えた人としての共通点を発見した」という意見でした。

日本に強い興味を持っていたり、日本語を勉強していたりする外国人ゲストからは、憧れの日本の家庭でのホームステイ体験について、「日本人の生活にじかにふれることができたことが何よりもよかった」「家族に日本語を教えてもらいとても勉強になった」「普段経験できない様々な生活の場面を体験でき、習慣や文化は違えども生活は一緒だということがわかった」といった感想をお寄せいただきました。彼らほど日本文化に強い思い入れがないゲストの目にも、ホームステイによる異文化体験は新鮮に写るようで

した。申込動機にかかわらず、ゲストからのアンケートに共通していたのは、アンケートのなかでほぼ全員が受入家庭の親切や寛容といったホスピタリティの気持ちや心遣いに感謝の気持ちを示していたことでした。

日本に強い関心を持っていたり、日本語を勉強していたりするゲストを受入れた家庭からの感想は「自分よりも日本のことをよく知っていて驚いた」「日本語を熱心に学ぼうとする姿に感心した」「自国のことなのに答えられないことが多く、勉強の必要性を感じた」といった意見が寄せられました。また、ゲストとの交流を通して「遠くの国が身近に感じられるようになった」「ゲストの国に対する印象がよくなった」といった肯定的な意見も多々ありました。

(3) 受入家庭における通念の相対化

[言葉よりも心]

受入家庭の傾向として、ホームステイの受入経験の少ない家庭ほどゲストのもてなし方に頭を悩ませ、言葉がゲストとのコミュニケーションの唯一の手段であると考えようです。世界各国から訪れるゲストの多くは日本語が話せませんでした。皮肉なことに、ホームステイにあたり「ホストファミリーはどんな人だろう？」と不安を抱くゲストはいても、言葉が通じないことへの不安や滞在中にコミュニケーションの不自由を感じたというゲストの声はほとんど聞かれませんでした。外国語が話せないことが外国人と交流するうえでの障害だと思い込んでいる日本人と、言葉はさして問題にならないと考えている外国人との温度差を感じましたが、そのような悩みを抱えていた大半の家庭は、ゲストとの交流を通して自然体での受入れが家庭にとってもゲストにとっても最良であることと、心を寄せ相手への思いやりを持つことが、ゲストとのコミュニケーションを図るうえで大切なことであると気づくようでした。特に、幼い子どもを持つ家庭の場合、子どもが何の抵抗もなくゲストと打ち解けている姿や、ゲストも子どもの場合、お互いが自国の言葉でやりとりをしながら仲良く遊ぶ姿から、ホームステイ交流の秘訣を学ばれる方々が目立ちました。このホームステイを通して、交流において大切なのは言葉よりも心であることに気づかれた日本の方々が増えたこともこのホームステイの成果と言って決して過言ではないと思います。

[日常こそかえって日本的]

さらに、受入家庭のなかには「名古屋城」「熱田神宮」「京都・奈良」「茶道・華道」といった、いわゆるステレオタイプの日本文化を外国人が興味を示す日本的なものとして考えるのに対して、ゲストは家族揃っての団らんや、料理を一緒に作ったこと、家の近所を散歩したこと、家人に「いってらっしゃい」「おかえりなさい」と声を掛けられたことなどといった、ごくありふれた日常生活の断片に日本的なものを見出すことに喜びを感じていました。この点は非常に興味深く、ここでも日本人と外国人との間にあるホームステイによる異文化体験に対する考え方の温度差を感じました。

しかし、「外国人は畳の上にふとんでは寝られない」「ごはんは味噌汁の朝食は外国人の口には合わない」「家の周りに外国人が興味を持ちそうな場所がない」といったような思い込みにとらわれていた受入家庭に、ホームステイの受入れ体験を通して、畳の上にふとんで寝ることが外国人にとっての日本文化体験になること、赤味噌や納豆が好きな外国人もあり、食事の嗜好は個々によるものであること、日本人にとっては何でもないような場所であるスーパーマーケットや100円ショップ、田園風景が外国人にとっては観光名所よりも興味を持つことといったことがらに、紆余曲折しながらも受入れた方々自身が気づききっかけを提供できたことは、当事業の大きな成果のひとつと言えるでしょう。受入家庭から寄せられた何通もの驚きと意外さの入り混じった感想から、たった2、3日間生活を共にしただけで、受入家庭がメディア等を通じて見聞きするだけで鵜呑みにしていた情報や、根拠のない思い込みを一掃・是正するだけの大きな力がホームステイにはあることを実感しました。

4) そのほかの成果

当事業をきっかけとして、新たに多くの国内外の教育機関や団体と友好的な関係を築くことができたことも、特筆すべき成果として挙げておかなければなりません。

(1) 今後の交流への期待

事業実施期間中に新たに受入れた海外の教育機関や団体のうち、ボイジ州立大学、ハワイ大学リーワード校、テキサス大学サンアントニオ校(いずれもアメリカ)、ブラジル日本語センター(ブラジル)、FICO(インド)、大韓青少年忠孝団(韓国)などは、既に翌年以降も当地域でのホームステイをしたいという希望を表明しているため、このような団体とは今後も友好的な関係を一層深められることが期待されます。

(2) 内外の団体とのつながり

また、ネットワーク参加団体からは「これまではわからなかった各団体の活動の様子がわかるようになった」「受入家庭が足りなくて困ったときに他団体に協力してもらった」という声や、「いつも決まった団体を受け入れがちなので、ネットワークに参加することにより受入れの幅が広がったのがよかった」といった声が寄せられたことから、ネットワーク参加団体間においても友好的な関係を築くことができたことと、参加団体に国内外の教育機関や団体と新たな関係を生む機会をもたらすことができたことも当事業の成果として大きく評価されるものと思います。

3 . コーディネーターの視点から

ここでは、1年6ヵ月にわたって当事業のホームステイのコーディネートを担当した名古屋ホームステイボランティアセンターのコーディネーターの視点から、当事業のホームステイ交流の特徴や成果、改善点等について考察します。

1) 「安価な宿」のニーズと「交流を目的とした宿泊」のギャップ

当事業の実施において、とりわけ博覧会会期中は、プログラムの主旨である「交流を目的とした宿泊先の提供」と、外国人ゲストが求める「安価な宿」のニーズとの間に一貫して大きな隔たりが存在していたと見られます。そのなかでプログラムの主旨に理解を得る作業がコーディネーターの役割としてしばしば必要になりました。

[大きかった「安価な宿」へのニーズ]

当事業のホームステイ・プログラムは国際交流・異文化相互理解を趣旨としたものですが、この点が理解されず、博覧会のための安価な宿としての利用を希望するケースが多く見受けられました。この傾向は博覧会会期中に滞在を希望するグループに特に顕著で、「今週末に泊まりたい」「シングル・ルーム1名分の予約をお願いします」などとする申込みが多々見受けられ、こうした傾向を典型的に示していました。

博覧会会場付近にホテルや旅館等の宿泊施設が少ないこと、名古屋市内の宿泊施設の予約が取れないこと、高額なことなどの理由が考えられますが、博覧会会期中の安価な宿へのニーズは、事前に想定していたよりもはるかに大きかったことがうかがわれます。

[「趣旨の説明」をくりかえす]

こうした申込に対しては、コーディネーターとして、まずプログラムの趣旨を説明するところから始めなければならず、しばしばそのためだけに大きく時間を割かれることになりました。

時間をかけて丁寧に説明した結果、理解を得られ、最終的には滞在者、受入家庭ともに楽しいホームステイの思い出を作ることができたケースもたくさんありますが、ゲストがもともと博覧会見学のための宿と捉えている場合、当方の説明を理解してもらうこと自体が困難なケースも少なくありませんでした。こうしたグループを受け入れた場合、交流を期待して受け入れる家庭との間で摩擦を生じるのが明らかなため、申込みをお断わりしたケースも多々ありました。

しかし、予め排除できないケースもあり、たとえば趣旨に賛同するとしながらも、受入決定後に示した旅程表では、受入家庭との交流の時間が全くとられていないなど、事務担当者レベルで十分な理解が得られていないと思われるケースもあり、このようなケースでは、滞在者のひとりひとりが趣旨を十分に理解していることは期待できず、受入

初日の受入家庭との対面前に、滞在者向けにプログラムの趣旨やホームステイの心構え等のオリエンテーションを行ったこともありました。

[旅行社 = 営利活動との調整の困難]

当事業では、旅行会社が旅行商品として主催する団体旅行も受け入れましたが、こうしたケースでは、営利を目的とする相手方に対して非営利活動への参加を呼びかける際の調整の困難も感じました。

旅行会社が窓口となる場合、ホームステイの手配をホテルなどの宿泊施設の手配と同様の感覚でとらえていると思われるケースが時々あり、当プログラムのホームステイは受入れに手を挙げるボランティア家庭が存在してはじめて成立するものであり、ホテル等の手配よりはるかに手間と時間がかかることに関して説明することがたびたび必要でした。

また、大人数のホームステイの場合には、参加者の変動が激しく最終的に参加者数が確定するまでに時間がかかり、来日直前まで参加者の申込書類の取りまとめがずれ込むなどのケースがありました。こうしたケースでは、参加者が決まらなると受入家庭の手配・組み合わせができない、受入家庭にゲストのプロフィールが送れない、受入家庭がホームステイのための準備をすることができず不安になる、ゲスト・グループや当センターへの不信感が生じる といった否定的な連鎖が引き起こされかねず、旅行会社側に再三注意を促さねばなりませんでした。

2) 「博覧会見学」と「受入家庭との交流」の両立の困難

当プログラムは博覧会開催中、多くの外国人が当地域を訪れるとみて、その機会を捉えて交流を深めようというものでしたが、博覧会会場が活況を呈するほど博覧会の見学と受入家庭との交流との両立が困難になる、という難問を抱えていました。

ホームステイ希望者に対しては、申込みの受付に先立って、必ずホームステイ期間中のスケジュールを尋ねました。受入家庭と過ごす時間の取り方により、当プログラムの趣旨が理解されているかどうか、また受入家庭と交流する意思があるかどうかを事前に判断することが目的でしたが、博覧会に対する関心が高い外国人グループ・滞在者は当然ながら、受入家庭との交流よりも博覧会見学のための時間を優先することになり、プログラムの趣旨にそぐわなくなり、受入が難しくなる、という問題にしばしば直面しました。

この問題は、滞在が1泊2日や2泊3日と短いグループ・滞在者ほど顕著に表れることになりました。

こうした短期滞在希望者には国内の大学や日本語学校に在籍する留学生たちが多く、社会人やスポンサーのいるグループと異なり、限られた予算で旅行を計画している場合がしばしばでした。日頃学業とアルバイトに追われ日本人と交流を育む機会に恵まれな

い留学生たちにこそ、このプログラムを利用してもらいたいとの思いから、留学生との調整を重点的な課題として取り組みました。留学生と何度も連絡を取りながら、彼らの希望とプログラムが意図するものとの間で妥協点を見出し、受入家庭側にも事前に説明し、納得していただいたうえで受入れをお願いするという形を取ることもありました。「万博は一生に一度の記念イベントだから」と言っていた留学生からホームステイ終了後に「万博も楽しかったけれど、ホストファミリーと過ごした時間の方がもっと楽しかった」といった感想が寄せられることもあり、コーディネーターとしての充実感を感じました。

3) 受入家庭の傾向と課題

(1) 交流も「案ずるより産むが易し」

[もてなす心が呼び込む悩み]

ゲストを家に迎えるにあたり、受入家庭は経験の有無を問わず、「どんな人かしら?」「食事は何を用意しよう?」「滞在中は何をして一緒に過ごそう?」といったことに考えを巡らします。

経験が少ない家庭ほど、思いを巡らしているうちに「せっかく我が家に来ていただくのだから、ゲストには楽しい時間を過ごしてもらおう」と思うあまりかえって悩みや心配事を抱え込んでしまうように思われました。

「言葉が通じなかったら?」「食事が口に合わなかったら?」「滞在中に時間を持て余してしまったら?」「ふとんのサイズが合わなかったら?」「子どもがゲストになつかなかったら?」「部屋が狭くてイヤじゃないかしら?」等々、心配事は多種多様で、時として深刻に考えるあまり、ホームステイ当日を緊張の極限状態で迎えた家庭から「滞在中に東海大地震が来たらどうすればよいですか?」と真顔で尋ねられたこともありました。

[「案ずるより産むが易し」]

しかし、大半のケースでは「実際に受け入れてみると、こうした心配ごとには取り越し苦労だった」という感想が多く聞かれます。

コーディネーターが「大丈夫!」と声を掛けるよりも、受入家庭が自ら経験を通して「案ずるより産むが易し」であることに気づくことがほとんどでした。

ホームステイ終了後に受入家庭から寄せられた感想のなかには、「ゲストが台湾の方なのでどうやってコミュニケーションを取ろうかと最初は悩んだが、漢字の筆談が通じておもしろかった」「ベジタリアンと聞き食事の心配をしたが、実際には自分たちが普段食べている日本食を用意すれば良かった」など、彼らにとっての悩み事が思い過ごしであったことに気づいた様子が綴られているものがあります。ここでは、その代表的な体験談をふたつ紹介します。

受入家庭 A：「夫と子供にとってはホームステイの受入れが初めての体験。4歳の娘は外国人に対応できるのが不安もありましたし、家もマンションなので広さもないし心配ばかりしていましたが、ゲストが来てからは普段通りの生活で、娘にとっては姉が出来たような感じでした。お布団のサイズも大丈夫でしたし、受入れで夫も協力的になったし、私達家族にとっても楽しい受入れでした。受入れに心配している方は、考える前に体験してみたら何てことないと思います。普段通りで良いのです。」

受入家庭 B：「何年振りかの、それも我が家にとっては少し長期の、そして平日の受け入れで受諾するまでに随分迷いました。交通の便の悪い当地で、ゲストを失望させるかもしれない、とも思いましたが、韓国の学生だということが魅力で受入れを決意しました。しかし、当日までに家の掃除をしたり、日程プランを立てたり、料理のメニューを考えたりと準備が大変で、正直後悔の念も湧きました。でも、実際にゲストを迎えてみますと、楽しくてアツという間の3泊4日でした。」

(2)「週末を挟んだ3泊4日」がベスト

財団法人名古屋国際センターの登録家庭は、登録時に受入希望期間として1週間以内または1週間以上1ヶ月以内のいずれかを選択していただきましたが、登録家庭を対象としたホームステイに関する意識調査(平成17年1月実施)において適当な滞在期間を尋ねたところ、52.4%の方々が3泊4日の滞在が適当と答えました。

[長期・平日の受入の困難]

全体的として滞在期間が長くなればなるほど受入れをためらう家庭が多いという傾向が見られました。実際に5日間以上の受入れが可能な家庭は少なくコーディネーターが困難でした。

また、滞在期間が週末をはさんでいる場合は比較的応募が多いのにくらべ、たとえば同じ4日間の滞在でも平日のみの滞在の場合は受入家庭を探すことがより難しくなりました。平日の受入れをためらう理由としては「家族が会社や学校に行っており家に誰もおらずゲストの相手をする人がいない」「平日の昼間にゲスト一人で家にいてもらいたくない」「ゲストに家の鍵を渡したくない」といった意見が目立ちました。

[「滞在が短すぎた」の感想も]

しかし、実際に短期間の受入れをした家庭からは「滞在期間が短かすぎた」「相手のことが少しわかった時点で別れてしまうのが残念」「交流の時間が少ししか持てずに終わってしまった」などといった感想もよく寄せられ、ここでも実際の経験が予想をこえて交流を進める構図がうかがわれました。また、1週間以上受入れていただいた家庭からは、「1週間の滞在を初めは長く感じたが、会ってしまうととても短かった」「もう少し長く滞在してくれるとよかった」といった感想をいただきました。後半には、こういった家庭あてに「交流をさらに深めていただくよいチャンス」とばかりに、前回よりも少し長い滞在期間のホームステイの受入れの依頼を持ちかけると、快く承諾していただけるようになりました。

(3) 「国際交流 = 外国語」という固定観念？

事後アンケートの記述を見るとゲスト側では「言葉が通じた、通じなかった」という点に言及するものがごく少ないのに比べ、受入家庭のあいだではこの点を巡る感想が多いのが対照的でした。受入家庭の間では国際交流 = 外国語という意識が強いことがうかがわれました。

[登録動機に多い「語学実践」]

受入ボランティアへの登録の動機から見ても、「英会話を習っているから」「子どもに英語の環境に慣れさせたい」といった理由を挙げられる方が多く、ホームステイ受入を語学、特に英語を实践するチャンスととらえる傾向が見受けられました。

実際の受入でも、英語を話すゲスト、特に欧米からのゲストのホームステイの募集にはゲストの職業や年齢にかかわらず受入の希望が殺到しました。電話で個別にホームステイの依頼をする際にもゲストが欧米出身の場合、その場で承諾していただけることが多くありました。

また、英語を母国語としないアジアや南米等の地域のゲストであっても、ゲストが英語を話せると分かったと、受入れを承諾する場合も多々見受けられました。逆に、英語が話せるといって受け入れた非英語圏のゲストが、実際には英語があまり話せなかったりした場合、受入家庭から「英語が通じず、ゲストとのコミュニケーションに困った」といった感想が寄せられたこともありました。

[日本語を話したいゲストとのずれ]

さらには、「日本語をたくさん話す機会に」とホームステイを申し込んだ欧米出身の留学生を受け入れていただく家庭に事情を説明して送り出したのにもかかわらず、留学生から「家族は英語でばかり話しかけてきたので日本語の勉強にならなかった」という感想が返ってきた残念なケースもありました。

[欧米志向]

アジアの非英語圏出身のゲストの受け入れ先を探す時には、上記の傾向がさらに顕著に表れたといえます。約400家庭あてに30人程度のグループの受入募集を行い、受入先が足りず二次募集をすることもありましたし、打診の電話でゲストの出身国を告げた途端、電話の向こうで声色がトーンダウンすることもありました。

ボランティア活動は本来自発的な意思にもとづいて行われるものである以上、致し方ないことと承知してはいるものの、英語圏のケースと比較した場合とのあまりに明白な違いに割り切れないものを感じることも少なくありませんでした。

[依然根強い固定観念]

言語や出身地域が受入れの判断基準になることで、出会いの機会がしばしば狭められて

しまう現状、また「国際交流は英語で行うもの」「外国人といえば欧米の人たち」といった依然根強く見られる固定観念を少しでも変え、切りひらいていくことが、この事業の使命でもあると考え、機会を捉えては受入家庭に向け、外国人と交流するうえで言葉は唯一のコミュニケーション手段ではないこと、ゲストの多くは英語を話すことを望んでいないこと、日本語を話したくてホームステイをする人も多いこと、日本に関心を寄せ市民レベルでの友好関係を築きたいと願っているアジア地域の人たちが私たちが気づいているよりもたくさんいること、などを説いてきました。しかし、依然として事後アンケートに「もっと英語を勉強しなければと思った」などの感想は多く、上記のような思い込みを変えていくことはなお長期にわたる課題であると感じました。

(4) 女性ゲストが人気

登録家庭の中では女性のゲストを希望する家庭が大多数でした。ゲストが男性である場合、国や言語、職業に関わらず、多くの家庭が受入れに二の足を踏む傾向にありました。一方、実際のゲストはむしろ男性が多く、女性のゲストを希望されるが故に受入れの機会に恵まれないという現象が起きました。

[女性の方が受け入れやすい?]

女性ゲストを希望する理由としては、ホストファミリーとして主体的に活動を行うのが女性であり、また主婦であることが多いため、「ゲストは女性のほうが付き合いやすい」「女性ゲストのほうが共通の話題がある」と考える傾向にあるようです。なかには「平日の昼間に男性ゲストと家でふたりきりになるのはちょっと・・・」「年頃の娘がいるので・・・」と言葉を濁されたり、「主人の在宅時ならば男性ゲストでもよい」と言われる方もいました。

[男性の方が気楽?]

性別の希望に関しては各家庭のそれぞれの事情があるため、希望を尊重するよう心がけました。しかし実際には男性のゲストの方が多かったこともあり、全登録家庭あての募集案内に「男性を受け入れていただける家庭が少ないためご協力をお願いいたします」と書き添え、男性ゲストの受入れを検討していただくよう協力をお願いしたこともありました。

女性の受入れを希望している限り選考に漏れる確率が高くなるという現状を告げると男性の受入れを検討していただける場合もあり、そんな家庭から「受入れは楽しかった」「男性の方が手間がかからず気楽」といった感想をいただくこともあり、ここでもまた「案ずるより産むが易し」が当てはまるようでした。

4) ゲストもホストも楽しんだ国内留学生のホームステイ

できるだけたくさんの外国人に日本の家庭と交流する機会を提供することを目的に活動していましたが、外国人のうちでもとりわけ日本の大学や日本語学校等で学ぶ留学生にホームステイの機会を提供することを重視しました。

ホームステイした留学生のアンケートからは、ホームステイをととても楽しんだことが伺えます。「日本の日常生活を知ることができた」「家族の暖かさを感じた」「自国の料理と一緒に作って楽しかった」といった感想もあれば、なかには「日本に来て8年になるが初めてホームステイをした。最高の2日間だった。今でも付き合いが続いており、日本の親のように心強く思っている」「ホームステイではふだん出会えない様々な生活の場面をゼロ距離で経験できた。習慣・文化いろいろ違えど、生活は実は一緒だということは最大の発見だった」というコーディネーターにとっても嬉しい感想が寄せられたこともありました。

受入家庭にとっては、留学生のホームステイ受入れは、日本語で交流ができる気楽さからお互いの国や文化についてより深く語り合えること、留学生の眼に写った自分たちの社会の様子について伺えることなどが、他のホームステイとはひと味違った体験として魅力に感じたようです。

[留学生のホームステイを重視]

留学生に対しては、プログラムを利用しやすいように一般よりも申込みに係わる手続きを簡素化し、日本国内の留学生が多く在籍する大学や日本語学校あてに当プログラムのちらしを何度か送り、各学校の留学生担当者に電話をかけて当プログラムを留学生たちに周知していただくようお願いしました。

また、期間を定めて予め受入家庭を募って留学生に限定したホームステイを企画したり、博覧会開催中の夏休み期間は留学生からの申込みを優先させたりした結果、たくさんの留学生を受け入れることができました。

[将来の知日派・親日派に]

留学生は世界中に数ある国の中で日本で学ぶことを選んだにもかかわらず、宿舎やアパートに住んでいたり、日々の勉強やアルバイトに追われるなどしているために、限られた日本人々とししか付き合う機会がなかったり、日本の家庭の暮らしぶりに触れる機会がなかったりするなど、日本社会に溶け込めずに孤立しかけている人たちが多くいるということと、彼らは日本の家庭での日常生活を体験し、日本語のシャワーを浴び、家族の人たちと交流することを渴望しているということ、コーディネートを通して強く感じました。

やがては国に帰る留学生に日本のことをよく知ってもらうことは、テレビや新聞などのマスメディアからの情報とは違った日本に対する判断力や想像力を持つ人びとを世

界中に持つこととなります。また、文化の違いを超えて共感できる仲間を持てるということは、今後ますます「地球市民」としてのつながりを認識していかななくてはならない私たちの未来にとっては心強いことです。

また、当プログラムを機に、受入家庭に自分たちの身近に志高く勉学に励む留学生がおり、その多くはアジアからの若者たちであることに気づいていただけたこと、彼らとの交流を通してアジアの国々に対する親近感や理解度を深めることができたことも、当事業の成果として評価できるものと思われまます。

特に、受入家庭からの感想のなかに「日本語がとても上手でコミュニケーションに問題がなく、外国の方と過ごす感じがしなくて物足りないかと最初は思ったが、日本語がよく理解できるぶん、政治的、歴史的な話題まで語り合うことができた。韓国と日本の考え方の温度差など、ゲストの体験談を聞きながら楽しく勉強になった。」「私のイメージしていた中国人とまったく違っていた。『日本の文化を知るには日本語を勉強しないといけない』と言って敬語や尊敬語など日本語を懸命に勉強する姿に感心した」といった、近くて遠かった国を身近に感じるようになった声を見つけると、ホームステイによる草の根の国際交流の促進の効果を改めて認識しました。

5) ネットワーク体制の課題

「ホームステイ受入団体ネットワーク」参加団体あてにホームステイの仲介を行うにあたりまず感じたのは、参加団体あてに打診をする際には受入の検討のため及びコーディネートのための時間に余裕を持たなければならないということでした。最低でも、受入当日までに2ヶ月半から2ヶ月の時間が必要であることを、実際の仲介事務を通して感じました。

当プログラムではゲスト・グループからの申込期限を希望滞在日の1ヶ月前までと設定していましたが、この申込受付の締め切りは、基本的にゲスト・グループにとって当プログラムを利用してもらいやすいよう設定したものであり、ネットワーク参加団体にとっては受け入れやすい条件設定ではありませんでした。この条件では、ホームステイのコーディネートの時間が充分に取れず、受入家庭の確保ができないリスクを背負うことになり、かえって受入れを敬遠してしまう結果になりました。参加団体のなかにはコーディネート事務をボランティアが担っていたり、意思決定にメンバーや役員による決議を必要としたりするため、結果として、早期に申し込みや問い合わせがあった時間的に余裕のあるホームステイについてのみ、参加団体に依頼することになりました。

次に、参加団体が主催・企画するホームステイの受入れやイベントと日程が重なるため、当センターからの依頼を受けていただけないということがありました。特に、博覧会会期中は、愛知県内の市町村による国際交流協会では、「一市町村一国フレンドシッ

ブ事業」関連イベントを実施しており、ホームステイの担当者がフレンドシップ事業の兼任者であることが多いため、日程的にも人員的にも当プログラムの受入れを検討していただくことが難しかったようでした。

最後に、まとまった数のゲスト・グループを受け入れていただける参加団体が少なかった、ということでした。参加団体は登録家庭数が数名という団体から百名を超える団体まで様々でしたので、各団体に受入れの機会を提供するために、全団体向けの募集案内においては、ゲストが夫婦1組といったような依頼から40名のグループといった依頼までバラエティに富んだ依頼を行いました。応募傾向としては少人数の依頼に人気集中しました。ある団体からは後日談として「博覧会期間中は、ボランティアたちも博覧会に行きたいので、ホームステイを受け入れてもらえる家庭が少なくて困った。受入経験が豊富なボランティアから『万博を楽しみたいからこの半年は活動を休ませてもらう』と言われたこともある。」と寄せられました。このようなことも、実は、各団体からの応募傾向に反映されていたのかもしれない。

4 . むすびにかえて

最後に、これまでの記述をふまえ、当事業の実施を通じて明らかになったことを振り返り、今後どのような課題が残されているのかを述べ、むすびに代えます。

「案ずるより産むが易し」という言葉に示されるように、ホームステイ体験の顕著な特徴は、体験が思いこみを突き崩していく、ということが典型的に現れる点にあるといえるでしょう。

ふだんの生活という、まさに知識ではなく、日常の生活感覚が織りなす場にあえて外国人という「他者」を迎え入れることで、日常の感覚が揺さぶられ、なじみの生活とは違うあり方があり得ること、そしてそれがかならずしも不快なものではないことに気づく。

ただこの体験も、体験したすべての人に同じ効果をもたらすわけではありません。ホームステイをめぐる現実には、いくつかの課題があります。

例えば、「 国の人への受入には気が進まない」「言葉が通じないと困る」「男性のゲストは不安」など、国、言語・性別についての先入観が多かれ少なかれ存在し、より多様な交流の機会を阻んでいる。また、実際に受入を体験しても、言葉が通じないことや、習慣の違いなど、「違い」が不快感を持って受け止められてしまうケースがある。

ホームステイ交流とて、違いを尊重し合うことの必要性に気づく「きっかけ」を提供するに過ぎません。経験者を日々取り巻く社会の現実が、せつかくの気づきを以前の状態に押し戻すこともあり得ます。またホームステイ中に体験された異文化に対する違和感が、かえって誤解や嫌悪、偏見につながる可能性もないとはいえません。

つまり、ホームステイ交流は、社会の様々な場面における多文化共生への努力から孤立した活動であっては国際理解の推進にとって意義ある活動としては成り立たない、といえます。上に挙げた課題は、ホームステイ活動自体の推進はもちろん、多文化共生に向けた社会政策上の努力と結びついてこそ解決に近づくといえるでしょう。

同様に、ホームステイ交流は一過性の事業であっては成立しません。「1000人ホームステイボランティア事業」は、博覧会関連事業として実施されましたが、この事業により生み出された近隣諸国との草の根のつながりや、留学生とのきずなを、博覧会のエピソードとして終わらせるのではなく、今後この地域の市民が市民レベルで世界とつながっていくための足がかりとして活かしていくことが重要な課題といえます。

名古屋ホームステイボランティアセンターは、博覧会終了後、事務局体制を大幅に縮小するものの、今後も名古屋とその近隣地域におけるホームステイ受入活動のネットワークの窓口として存続します。引き続きホームステイ交流の機会を提供することを通じて、異なる文化が共生する社会づくりに貢献したいと願っています。